

■■ 特集「人間関係の学び方：その先にあるもの」

教育の冒険と人間関係の学び方 南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから

日 時：2025年7月5日（土）13:00～14:30
「南山大学人間関係研究センター設立25周年＆
『人間関係の学び方』出版 記念イベント」
場 所：南山大学D棟5階D51教室
登壇者：**グラバア俊子**
土屋耕治、楠本和彦、中村和彦

センター長：

本日は本当にお暑い中を、ちょっと大げさですが、命の危険も顧みず、この記念イベントにご参加いただきありがとうございます。今日は南山大学人間関係研究センターの25周年と、それを目指してというわけではなかったのですが、昨年私たちセンター員が力を合わせてつくりました『人間関係の学び方』の出版記念イベントを開催させていただきたいと思います。これからの半日の時間の中で、私たちが受け取ってきたバトンを、それはどんなものだったのかなというのをふりかえりながら、また次にどんなふうにつなげていくといいのかなということを、皆さんと一緒に考えて次に向かっていけるような、そんな時間になるといいなと思っています。ぜひご協力をよろしくお願いいたします。

では早速、こちらの皆さまにバトンを渡してよろしいでしょうかね。

では、全体会1を始めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

土屋：

ありがとうございます。

それではバトンを受け取りまして、座談会の担当をします土屋です。よろしくお願いいたします。

「教育の冒険と人間関係の学び方：南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから」ということで、今から90分ほどの時間を過ごしていけたらと思っています。

まず、この時間をどのように過ごしていくかということですが、チェックイン、いろいろ小グループでのレビューという時間を、間に挟んでおります。これは、一方的に何か聞いていただくというよりは、周りの人と話しながら、こうだったかな、ああだったかな、こんなことを考えたよということも紹介し合

いながら進めていく、そんなことができればよいかなと考えております。最初にそのような周りの方と自己紹介する時間があり、これまでの歩みを少し紹介します。グラバア先生をお迎えしていますので、グラバア先生のこれまでの時代観とか、このような流れの中で体験学習が育まれてきたんだよという話をお伺いできればと思っております。

では、まずチェックインとしまして、ちょっと周りの方々と、椅子を動かしたり向きを変えたりしていただいて、2～3人で少し声を出していただければと思っております。お名前でありますとか、「何があなたをここに連れてきましたか」ということについてです。何かこういうきっかけでとかこんな思いがあったとか、こういう機会があったとか、そのようなことを少しご紹介し合うような、そんな時間になればと思っております。時間は5分弱取っていきたいと思います。よろしいでしょうか。周りを見渡していただきながら、1人になっていそうだったらちょっと声をかけていただきながら、過ごしていけたらと思います。ではどうぞ。よろしくお願いします。

土屋：

この座談会の概要ですけれども、お配りしたファイルの中にも挟み込んであるところです。私たちが長年取り組んできたラボラトリー方式の体験学習の実践は、2000年に南山大学に心理人間学科と人間関係研究センターが設立されたことにより、さらに発展してきました。本全体会では、人間関係科の教育から心理人間学科、また人間関係研究センターの実践に長年携わってこられたグラバア俊子先生をお迎えし、体験学習の実践の軌跡を振り返ります。また『人間関係の学び方』の編集を務めた3名の編者とともに、これまでの役割とこれからの時代に求められる視点というものを見通していこうと思っております。そして、今回の話に関しましては録音をとらせていただき、文字起こしをして、紀要に掲載できればと考えているところです。

では、まずグラバア先生にマイクをお渡しする前に、少しこの人関センターの歩みを紹介したいと思います。

これはホームページにあるところですが、私たちの研究目的は、「広く学際的視点に立った人間関係研究」として、人間関係に関する理論的研究、またアプローチ方法の実践研究、人間性豊かな関係性と社会の創生に向けた応用研究に取り組んでいくこと、そして、研究のみならず、左上にありますように公開講座の開催、また右上にありますように公開講演会の開催、さらに『人間関係研究』という論文雑誌を刊行しております。

今回25周年ということなのですが、実は左後ろにあるもの、あれも休み時間などにご覧いただければと思います。あれは、公開講座が何年に、どういうタイトルの、どういう講座があったのかを全部記録が残っておりますので、それをまとめたものです。参加人数と担当講師などもありまして、昔はこ

ういう名前のこういう講座もやっていたんだとか、そのようなことも見ていただければと思います。また、右後ろにあります、今、中尾先生がいらっしゃるところは、人間関係研究の論文としてあるもの、これはもうフリーでPDFでウェブ上でご覧いただけるものがほとんどですけれども、冊子としてあるものです。あとこちらの講座に関するカタログなどもありますので、ぜひぜひご覧いただければと思います。

では戻ります。人関センターにまつわる歴史ということで、3枚ほどスライドがあります。

1973年に南山短期大学に人間関係科が新設されたことがスタートです。そして、1977年に人関センターができていきます。そのときの大庭先生が「医学部の教授が大学での研究教育と大学病院での臨床活動の両立により素晴らしい研究成果をあげるように、生きた人間関係を研究する人間関係科のスタッフも大学内にとどまらず社会現場とつながる研究の場が必要である」という趣旨を述べられ、社会人向けのいろいろな研修の場だったり、その中で私どもも学んでいく形ができていったようです。

下のほうを見ますと、1987年にその一環として東海地区では初めてTグループによる人間関係トレーニングが実施され、84年には研究紀要ができるということがあります。

2000年に人間関係科と南山大学人文学部教育学科が統合発展し、人文学部心理人間学科ができました。そのときに、それまで短大のほうにあった人間関係研究センターが南山大学人間関係研究センターという名前になりまして、新たなスタートを切ったということです。また、2004年には大学院ができました。

2017年についてもここに書かれているのですけれども、実は短大のときからスタートをカウントするのか、2000年以降にカウントするかでちょっとダブルスタンダードがあって、2017年のときには創設から40周年ですねという紀要のテーマが実はあったりしながら、だけど今回は2000年のときからカウントした25年ということで、今回の機会があります。南山大学人間研究センターの歩みについてでした。

公開講座については、この下にある数字はホームページに出ていたこの段階での数字だったのですけれども、9587名の方にご参加いただいたということでした。今はさらに人数も増えまして、累計262講座、延べ9657名が修了し、公開講演会も45回開催したということです。ミッションは「多様なあり方を尊重する、人間性豊かな社会を創り出すために」ということで、引き続き歩を進めているところでございます。

次のスライドは、『人間関係トレーニング』から『人間関係の学び方』へということです。今回のイベントのもう1つの意味が、この書籍の刊行イベントであるということです。『人間関係トレーニング』は、92年の9月に初版が出たという記録が残っております。その後12年7カ月を経て第2版が出て、私も

本当に長く使っておりました。

そして、ナカニシヤ出版さんからこのたび、2024年の11月に『人間関係の学び方』という、『人間関係トレーニング』第2版から19年7カ月を経て誕生したということであります。準備し始めたのが2021年で、4年とか5年ぐらい前で、途中コロナも挟んだこともあって少し進みがうまくいかなかったようこともありましたけれども、実は今日いらっしゃるナカニシヤ出版の後藤さんにも、編集でも非常にお世話になりながら、何とか完成して刊行することができました。

今回のこの表紙の写真が、実際に左ぐらいのちょっと暗い感じから、色を明るくして右側のこれぐらいになっているのですが、私がたまたま去年研究休暇でイギリスに行く機会がありまして、そのときに撮ったものです。実は裏表紙のところにグリーンパーク（ロンドン）で撮影というのが書いてあります。それをちょっと違う角度から撮ったものがありまして、それが今日、25周年イベントのクリアファイルの写真として使われているものです。

いろいろと紹介をしまいいりましたが、戻りまして、今回25周年ということで、人間関係科からラボラトリー方式の体験学習の実践、その歩みを知り尽くしていられるグラバア先生にマイクをお渡しして、どういう時代であったのか、今またどのように考えるかということをお聞きできればと思います。

では先生、よろしくお願いいたします。

講師（グラバア俊子氏）：

ご紹介をいただきましたグラバア俊子と申します。

懐かしい顔もあれば、初めての方もたくさんいらっしゃるところで、今日、このようなタイミングでお話しする機会をいただき、ちょっと緊張しております。まあ暑くて、クラクラしているということもあるのですが。

皆さん、まず差し上げた資料1をご覧ください。何しろこの年になると話したいことがいっぱいあって、話し切れない、時間がただ延びるということが結構あると、一応自覚しております。ですから、話し足りないところも資料を見ていただければそれなりに分かっていたかなと思って、今日は話せるところまで話したいなと思っています。

本当に緊張していますね、声が。皆さん、お名前を知っていられる方が多いと思うのですが、センター長を長くしていられした津村俊充先生、この東海地区の学校に体験学習という方法を導入することにすごく注力なさって実績を残された先生なのですが、彼からどのぐらい前からかな、「グラバアさん」というふうによく言われるようになりました。まあその通りなのかもしれませんが。今日はこういう機会をいただきましたので、せっかくですので、私の記念としても、はい。今後はこのように（愚楽婆）と名乗ろうかなと思っております。このぐらいの年になりますと、若い頃は一生懸命やってきたわけなのですが、若気の至りというか、自分の足りなかったところとか、そういうことも

次第に見えてきて、反省しきりというところもありますけれども、まあまあそれも許して何とか前に進もうかなという気持ちが、「愚楽婆」というこの名前に表れております。

土屋先生から何かお話をと言っていた時に、2点思ったことがありました。1つはやはりセンターの25周年、四半世紀ということですね。この会というのが今までのセンターの歩みを振り返り、そして、新たな若い方がたくさんいらしていてうれしいなと思っているのですけれども、やはりいろいろ変わっていきますよね。変わっていかないと文明って衰退してしまいますから。だから今は変化の方向性を求める良いチャンスなんだなということが1つ。

そのときに、しっちゃかめっちゃかでもいいから、いろいろな考え、また突拍子もないものでもいいから、いろいろな考えを聞くチャンスがあればいいかなというお話もいただいたので、資料1に書いてあります「私たちは今、歴史の中のどこに立っているのか」ということで、少しくいうトレーニングのできてくる歴史というものを、皆さんに知っていただきたいと思います。そのときに、今の時代でしたらこういうデータというのは簡単に取れるんですよ。今回の資料2-1, 2-2もCopilotにも手伝ってもらいましたけれども。

ですから、私がここでお話しすることは数字的なことよりも、そこにすごくご縁があって、そこで生きてきて、それで体験学習に出会ったからこそその人生だと思っている私なので、そういう人間がどういうふうに出会いながら生きてきたかという、そういうちょっと、皆さんがイメージできるようなお話ができたらいいなと思っています。私的なお話で申し訳ないのですが、まあそれも1つかなと思って、少しお話を聞いていただければと思っています。

“今ここ”で起こっている生のグループ体験を学習素材とするTグループの教育理論を、実際の高等教育に応用するというか、転換していくということで生まれた人間関係科、そして体験学習。そのご縁の始まりは、なんと私の場合は生まれたときからなのですね。というのは、資料1の年表を見ていただいて、一番右側ですね。Tグループ誕生が1947年と書いてありますが、私、1947年9月26日生まれでございます。途中から気が付いたんですね。最初、私数字に弱いものですから全然そういう意識がなかったのですが、「ああ、そうか。本当に私の生まれた年とTグループの生まれた年は一緒だったんだ」と、ちょっと感慨深いものがありました。また、ボストン大学大学院に留学中に、ケネス・ベネから1946年の発端のコネチカットのワークショップの様子を直接お聞きするチャンスにも恵まれました。

では、「体験学習の成立過程」の欄を幾つか選んで見ていきたいと思うのですが、私は立教大学のキリスト教学科で、あとは大学院の組織神学というところを卒業しております。それで、まずどこを見るといいかな。

あっ、そうそう、「1968年 日本にて大学紛争多発」というところがありますよね。それをちょっと下へいきますと「1969年 立教大学ロックアウト」と

書いてあります。

先ほど先生がコロナのときに大変だった、本当は20周年をやりようと思ったけれどもコロナでできなかったという話を聞いたのですが、いや、考えてみるとそれどころじゃないんですよ。私、大学4年間授業料を払いました、でも、大学教育は3年間しか受けられなかったのです。結局大学はロックアウトされてしまって、だから、4年のときは全然大学の授業ってなかったんですよ。入れなかったの、大学に。そういう状況で、それでも一応授業料を払っていたので、卒業式だけはあったんですよ。これって、何ていいでしょうかね。すごくサボった学生さんで、出席時間が足りないから卒業できませんと言うけれども、大学が勝手に、まあ勝手にというのはおかしいかもしれませんが、諸事情で1年間閉ざしていても「はい、大学卒業」という、そういう時代だったわけです。

このときの学生闘争では、本当に、器物破損はもうそこら中でありました。蛍光灯を投げてきたりとかね。爆発するんですよね。樺美智子さんって覚えていらっしゃる方は多いと思いますが、東大の女子学生ですけども、安保のデモの途中で、今回は政治のことは触れていないのですけども、デモで亡くなったのですね。そういうすさまじい時代でありました。

そして、たまたま私の指導教員が柳原光先生という方で、ここにありますように「1962年 立教大学キリスト教教育研究所設立」とありますけれども、その所長をなさっていらっしゃいました。その立教大学でも、団交とかいろいろあったんですよ。

まあ一応教育が再開した、ロックアウトが解消された。その後の收拾、つまりカリキュラム改革が行われました。いろいろな学生からの要求もたくさんあったわけですよ。私から見てもリーズナブルな要求というのがたくさんあったのですね。そういうものを踏まえて、どういうふうにかリキュラムを立て直そうかと考えたときに、柳原先生が立教大学の文学部の部長代理ということで、その任を担ったわけです。そこで柳原先生が打ち出したカリキュラムの1つが、文学部相関カリ、各学科がお互いに関連し合うカリキュラムということで、これが山梨県の清里の清泉寮で行われた第1回の、たぶん日本で初めてだと思うのですが、大学生のTグループだったのです。

私はその時点では全然Tグループを知りませんでした。ただ、柳原先生から「あなたはこのTグループに参加しなさい」というふうに、指導教員からの命令というか指導が入りまして、それで夏、清里で何も分らずに参加したわけです。それが私のTグループ、ひいては体験学習との出会いだったわけです。それは私にとっては、ある意味人生の大きな転換点になりました。どういうことかといいますと、そのTグループの中でトレーナーというある意味権威に対して、グループ全員で反抗したりボイコットしたり、いろいろやりました。わざと小さくなって輪の中に入れないとか、そういうこともしました。

でも、そこで私に指摘されたことは「あなたは考えることはできる、頭では考えているけれども、自分の気持ちに一切気づいていない」ということでした。今でも覚えていますけれども、「あなたは今、何を感じていますか」と聞かれるんですね。「こう思っています」と言うと、「それは考えでしょう。感じじゃない。感じているのとは違うんですよ」というような、そういうやり取りを何度も繰り返した後に、最後に「ああ、もう分からない」と叫んだのです。もう本当に分からなくなっちゃったんです。そうしたら「それが今のあなたの気持ちだよ」と言われまして、私はそれですごくスツと、「ああ、これが私の気持ちなのか、今の気持ちか」と分かった。更に指摘されたのが「あなたの中には理性もあるし感性もある。だけど、あなたは理性しか使っていないじゃないか。もったいない。飛行機の片肺飛行、つまりエンジンが1個で飛んでいるようなものだよ」と言われました。それはすごく私にとっては大きな気づきでした。

それともう1つは、最後のセッションのときに、お互いに一人ひとりのメンバーに自分の気持ちを伝える、それも無言で伝えるという、そういうエンディング、クロージングがあったのです。そのときに、私は1人の同級生の女の子に思わずハグしていたんですね。それまでの自分だったら考えられない行動なんですよ。そのときに、「ああ、何て自然なことなんだろう。そして、なんと温かくてお互いに伝わり合う関わりなんだろう」、と深く感じました。それを契機に、私の研究テーマとして「非言語コミュニケーション」。それまで、私は特にテーマが見つからないうちに大学院に進んでいたのですが、それが私のテーマになって、今の私につながっているのです、すごく大きな体験だったわけですね。

私はそれから立教大学のキリスト教教育研究所（JICE）にアルバイトで関わり、オブザーバーをしたり、コトレーナーをしたり、トレーナーをしたりという経験や研究をいろいろさせていただきました。私の恩師の一人であるリチャード・A・メリット先生が非言語的な関わりやいろいろな実習を教えてくださいだったので、私はすっかり夢中になりました。2年で修士卒業のところ、もうちょっと経験を積んで修論を書きたいということで、3年かけて卒業することにしました。それもまあご縁といえばご縁なのです、実は。

その期間に初めて私は大人のTグループに参加しました。そのときのメンバーが、女性が2人だったんですね。そのお1人が吉川房枝先生という方でした。実は吉川先生は「人関の生みの母」といわれている方なのですね。彼女は当時カテキスタ会という在俗修道会のトップを務めていらしたのです。もともと立教大学キリスト教教育研究所のトレーニングにはいろいろな宗教の方々が、キリスト教でもカトリックから、いろいろな教団や教会の方、それから立正佼成会とか、ほかの宗教団体、仏教系の方もいらしていたんですね。カテキスタ会からも参加メンバーがいらしたわけです。

彼女はトップとして、いったいそれはどういうトレーニングかちゃんと把握

していなければいけないというお気持ちが強かったようなのですけれども、それで参加なさったのです。

丁度その頃、吉川先生が教鞭をとっていた南山短期大学では、創立5周年をめぐして英語科に加えて新しい学科を創設しようと検討中だったようです。Tグループを体験した吉川先生は意見を求められて、ではこういうもの、こういう人間関係の教育を短大でやったらどうでしょうかということになり、清里での教育計画ラボラトリー・トレーニングの時に、こういう計画があるということを経験のところで柳原先生にご相談していたのですが、ちょうど私もそのときに居合わせたのです。それから、副学長の大庭先生も池袋のJICEまでいらっしやまして、その話がどんどん進んだわけです。結果として、1973年に南山短期大学人間関係科というものができました。

でも、文科省（当時は文部省）としてはこの名称は初めてだったのです、「人間関係科」というのは初めてだったのです。さらに輪をかけて、これ「学科」じゃないんですよ。普通はみんな、心理学科とかそういうという名称になるのですけれども、そこでこの教育の冒険をやろうとしていた方々は、学科を学ぶのではない。つまり、人間関係について知識を得る、学ぶということではなくて、「ついて」ではなくて、人間関係そのものを学ぶ。つまり、これを学ぶことによって、人間関係において関わる者として成長をちゃんとするんだ、成長の仕方を学んだという思いがすごく強くて、「学」は拒否したのです。人間関係科という名前になりました。

そして、私は丁度設立の年に卒業となり教務助手としてそこで働きはじめ、2年、3年必死にやって、すごく面白かったのです。楽しかったし、そこに関わっていらっしやる方も、沢田慶輔先生なんて日本のカウンセリング界の本当に重鎮なわけですが、そういう方々も夜遅くまでみんな熱心に関わって、カリキュラムを考えたわけなのです。時には、出席は取るべきかどうかということとで本当に涙が流れるような討論をなさったり、本当に真剣に。そういう熱があったので、もう楽しくてしょうがなかったです。だけれども、やはり2年まるまるやってみて私としては楽しいんだけど、教育という広い世界から見たらどういう位置付けなんだろうか、どういう意味があるんだろうか、そこをちゃんと見てみたい、外から見てみたいという気持ちが出てきて、ボストン大学に留学をさせていただきました。

そのときも、私はあまり考えがないのか、「留学したい。行きます」と言っていたのですけれども、大庭先生が、南山大学のほうには教員が留学するという制度もあるから、短大にもそれを導入しようということで、ありがたいことにサポートをしてくださるということで、約2年間留学しました。

そして、あっ、そう、大事なことを言わなきゃいけない。

だいたい前に戻りますが、私の指導教官で、JICEの所長として新しい人間関係科を立ち上げるサポートをしてくださった柳原先生は、科ができてからも南

山短大に来て講義をしてくださったのですけれども、私はそこで「この教育は民主主義のための教育である。」という発言を、当時はよく聞きました。実際に行った実習も、コンセンサス実習が結構多かったかもしれません。

私はちょうど短大の人間関係センターの、最後のセンター長ということになったのですが、そのときにちょうど非常勤で平山恵先生という方がいらっしゃいまして、その方の関係で国際医療センターのほうから協力してほしいという申し出がありまして、一応それを受け取ることにいたしました。JICAとも協力をして、中村先生も、パキスタンにもバングラデシュにも行かれましたよね。

この年表を見ていただいたら「国連の活動とアメリカの社会活動」とありますが、このアメリカというのを「米国」にしたほうがよかったですね。アメリカというのちょっと広過ぎるので。それから左側のライフスタイルの変化というのを見ていただくと、1950年あたりがちょうど大きな転換点になっていまして、そこまでは「生存指向ライフスタイル」ということで世界は動いてきたと。そこでこのホーソン実験が本当に象徴的だなと思うのですが、「生産性」という言葉を矢印の中の「経済力」「学歴」の上に書き足していただきたいのですが、まさに生産性を求めているわけですね、ホーソン実験でも。それを求めるんだけれども、そこにはすでに「成長指向ライフスタイル」、「私が私であること」、「個であること」、「共にあること」、そういう精神的な豊かさというものも求められるという流れが生まれていたわけですね。

両者を見てみますと、そういう流れと、いわゆるマイノリティに対するいろいろな国際年がありますが、結局パキスタンやカンボジアなどへの援助、そこに人間関係トレーニングを導入してほしいということで導入をしたわけなのですが、センターの活動はそういう流れに合っているなど、私は考えているのです。そうした活動を大学の人間関係研究センターに引き継げたことは、私にとって大きなことでした。

もう時間がないので、もう1つだけ私のことでお話をさせていただきたいのですが、はじめに名前のことを申し上げましたね。私は「グラバア」と名乗っています。国際結婚をしたということなのですが、夫はNASAのエンジニアで、ちょうど当時アポロ計画に携わっていて、アームストロング船長に、月面探査機に関してちょっと指導をしたと誇らしそうに言っていました。そういう時代だったわけですね。では皆さん、社会活動のところに「国際婦人年」と書いてありますが、女性の方、あまりピンとこないかもしれないのですけれども、なぜ私がグラバアと名乗っているかということと関連があるのですよ。

実は、国際結婚してみて初めて分かりました。私は子どもが2人いるのです。しかし、国際結婚しても女性は子どもに日本国籍を渡せないんですよ。渡せなかったのね。男性はできるんですよ。でも、女性はできない。だから、それを正そうと「国際結婚を考える会」に入り社会党の土井たか子委員長を通じてい

ろい働かけたけれども、埒が明きませんでした。結局どうして変わったかという、国際婦人年で、婦人の権利条約を日本国が批准したんですよ。そうしたら、国内法を変えないといけない。外圧です。外圧で、やっとうちの子は日本国籍が取れました。名前もどうするか、選べるようになりました。

私は子どもを保育園に入れたときに、子どもが「自分はグラバアで、お母さんは藤岡って呼ばれてる」と言う。それも私は仕事をしているから、よく藤岡と呼ばれるわけですね。それって子どもには理解できないじゃないですか。だから、そういう混乱を避けるために、グラバアと仕事の上では名乗らせてくださいという呼称願いをつくって提出して、それでグラバアというふうに名乗らせていただいていたわけです。

いざ法律が変わって、子どもに「どっちの姓、グラバアにする？ 藤岡にする？」と聞いたら、「僕は日本で生活するから藤岡がいい」と言われて、私はちょっと困ったのですが、まあ今のところそういうことになりました。

ということで、どういう時代だったかというお話については、これで終わりたいと思います。あとのことについては、またチャンスがあればお話ししたいと思います。

どうもありがとうございました。

土屋：

ありがとうございます。

ここまでグラバア先生からいろいろお話を伺いました。いろいろな資料もありながら、聞いてみたいこととか、こんなことを考えたんだとか、こんなことが印象的だったんだとか、いろいろ思い浮かんでいらっしゃるかと思います。そのようなことも、少しまた5分ほど小グループで過ごす時間を取りますので、こんなことを感じたんだとか思ったとか、ちょっと言葉を交わしながら過ごしていただければと思っております。では、5分ほど取ります。どうぞ。

土屋：

では、少しここまでの話を聞きまして、中村先生と楠本先生から、そして私からも、ちょっと補足だったりコメントだったり質問だったりということを投げかけていけたらと思っております。

では、中村先生からお願いいたします。

中村：

人間関係科の話をグラバア先生がされていて、2つの「文科省初」なんです。1つは「人間関係」という名前が付いたこと、もう1つは「学」が取れたこと、この2つ。その後、人間関係学科はいくつか設立されましたが、「人間関係科」と名乗る学科は存在していません。そういうところがあって私も最初に人間関係科に採用していただいて先輩から言われたのが「学問を教えるな」ということでした。それまで社会心理学を一生懸命研究してきたのに、学問を教えるな、

体験から学生とともに学びなさい、そして、いいトレーナーになりなさい、と言われたことが印象的でした。

当時、人間関係科は「何々学」って、心理学とかいろいろな授業があったのですが、それを全部非常勤にお願いしていて、専任は体験学習をチームでつくるといことで、夜遅くまでスタッフミーティングをして、授業をやって、またふりかえりのミーティングをするという連続だったなと思っていますが、当初も専任は学問を教えずに、体験から学ぶ場をつくるというふうなことが徹底されていましたか。

グラバア：

はい。最初の頃、一番苦労したのが、みんなに伝えたい内容をどういうふう
に体験学習の形に組んでいけるのかということがすごく大変でした。だから、
最初の頃は、例えば本を読んで分かち合うとか、私たちもあまりバラエティー
がなかったんですね、やり方の。そういう意味では、この内容をどうやったら
体験学習という形に組めるんだろうかということを本当に模索、探し、失敗も
しました。例えば、学生からは「ふりかえりが書けない」とまず出てきました、
1期、2期は。だから、研究法という時間にふりかえりの書き方を教えましょ
うというようなことをやっていました。そういうことでいいのかな。

中村：

研究法でふりかえりの書き方を教えたんですか。

グラバア：

そうなんです。

中村：

これも本当に、今でもやっているフィールドワークという授業は、研究法と
してフィールドワークがあるんですけど、私たちはそれを違う解釈をして、学
生さんが現場で体験から学んでいくのがフィールドワークだみたいなね、そ
ういう独特の名前の付け方をしていた、なんていうのも関連が深いなと思いま
したね。

グラバア：

はい。

中村：

もう1つ、私がグラバア先生から昔聞いたのは、前の『人間関係トレーニング』
の本の中で、体験学習のサイクルの話、「イヤハ (EIAHE)」というサイクル
が出ていましたね。体験する、指摘、分析、仮説。NTLは「イヤグ (EIAG)」だ
ったんです。最後の「G」が「Generalizing (一般化する)」だったのですけれど、
イヤグがイヤハに変わったのは、実は南山短期大学の当初、グラバア先生たち
が勝手に変えたというエピソードがあるのを聞いたことがあるんですけど。

グラバア：

そうですね。というのは、現実問題として、あの年代のお嬢さんたちと

2年間一緒に学んでいって、Generalizeというところまでいきつくのか、ということが1つ。また、Generalizeしてそこからどうするのか、どう成長につながるのかという問い。体験学習の循環過程をじぶんで回していく力をつけるにはどうしたらよいかということを考えると、それにはやはり、こうしたらいいんじゃないか、ああしたらいいんじゃないか、もしかしたらこれがいかもしれない、というように選択肢を豊かに発想することが大切。だから、本当に小さな、よく言われる、できそうな次の一步を探すということは、Generalizationよりは仮説化、こういう仮説を立ててやってみた、失敗しても、こういう仮説だったから、じゃあ違う仮説を立ててみたらいいんじゃない？と。学生にとっても気軽に取り組みやすいですね。中にはもっとちゃんと考えた方もいらっしゃると思うんですけど、でも、私的にはそんな感じで取っております。

中村：

南山短期大学のスタッフの人たちが生み出したモデルの名前は、今回40年を経て『人間関係の学び方』では新しいモデルにさせていただいてバージョンアップをしています。

グラバア：

私も最初に目が行きました、そこに。「おおっ」と思って。

中村：

私からは以上です。

土屋：

ありがとうございます。

楠本先生、お願いします。

楠本：

楠本です。よろしくお願いします。

僕はグラバア先生に質問というよりは、グラバア先生が以前、南山短期大学人間関係研究センター紀要に書かれたことを取り上げながら、ラボラトリー方式の体験学習におけるカウンセリングの位置付けについて、ちょっと話してみたいなと思っています。

グラバア先生は「そんなこと私、書いたっけ？」とさっきおっしゃっていましたが、南短の人間関係研究センターの紀要で、2号と3号の合併号なんです、かなり初期の頃のお話でグラバア先生が書いていらして、人間関係科における人間関係各論という授業に援助法というのがあって、援助法の中の実際の授業名としては「カウンセリング」という授業が一番長く続いたんだということを紹介してくれているんですね。そんな中で、1970年代から80年代ぐらいにかけての人間関係科におけるカウンセリングの位置付けについてグラバア先生は書いていらして、ちょっと読むと、グラバア（1985）は、「創設期、人間関係科の目指すことの1つとして変革体（change agent）の育成ということが

あり、これが大上段に構えたものならば、カウンセリング的なかわりができる人の育成というのはそれを下から支える構造であったのではないかと思われる」というふうに言っています。チェンジ・エージェントとして、「今ある関係のあり方を切りくずし、変化させ新しい形をもたらし力と、カウンセリング的関わりということで、あるがままを受容し共感的に理解するという、今ある関わりそのものを支える力の、以上2つの働きがカリキュラムの中に同時にあることに意味があったのではないだろうか」というふうに書かれていらっしゃるんですね。

グラバア：

はい。

楠本：

僕もこのグラバア先生の本を読んだことを読んで、僕の実感ともフィットするなというふうに思ったので引用させてもらったんですけど、やはり人間関係科の体験学習はすごく幅が広くて、中村さんは組織開発が一番の専門だと思うんですけど、僕はカウンセリングなので、個人の尊重だったりお互いの関係の尊重だったり、せいぜい小グループによる体験学習であるTグループまでが僕の専門、守備範囲なので、そういう中で人間関係科の学び、あるいは体験学習の学びにおいて、カウンセリングってどういう位置付けなんだろうということや、やはり考えざるを得なかったところがあるんですけど。まさに一方でチェンジ・エージェントとして環境を変えていこう、社会を変えていこうというような動きを、たぶんグラバア先生の方々は、本気でそれを目指していたという印象があって、僕はそこまで（筆者注：同じ熱量では）ようせんわと思っているところがあるんですけど、あの年代の人たちって本気でこれを考えていたんだよなというようなことは、後から入った人間として、つくづく思うんですね。そういう力があって、熱があった、動きがあった。その一方で、それを補完するものとして、本当に今の個を大事にする、あるいは目の前にいるその人を大事にする、自分を大事にしてもらうということを身に付けてもらう、あるいは1対1の丁寧な関係の中で相手の人が成長していく、それをサポートするというような、そんなカウンセリングの発想というか大事にしているものというのが、やはりラボラトリー方式の体験学習においても人間関係科においても心理人間学科においても、大事な要素の1つなんじゃないかなと僕は思う、ということをお話したくなっています。

グラバア：

チェンジ・エージェントを一番真面目に一生懸命語られたのは、私の理解ではメリット先生だと思うんです。でも、メリット先生は同時に、色紙によく「一隅を照らせ」と書いていらっしゃるんです。まさにそういうことなんじゃないかなと、両方ともメリット先生は本気だったと思います。

楠本：

ありがとうございます。

中村：

ちょっと付け加えさせていただけると、Tグループ自体のスタート、アメリカでTグループが始まったときのトレーナーたちの目的は、チェンジ・エージェントの育成だったんですよね。グループの中で、そのグループでどんなプロセスが起こっているかということを診断して働きかける、そういう力をTグループの中で付けた人が、社会とか組織とかでより良い民主的な社会や組織をつくっていく、みたいなことがあったんですけど、短大の初期って、チェンジ・エージェントを私たちは育てているんだということがかなり合言葉になっていたというか、メリット先生を中心に語られていた感じですか。

グラバア：

そうですね、人関通信のタイトルに「チェンジ・エージェント」とメリット先生が書いたものがありますし、メリット先生は本当にフィールドワークというか、もっと本当に外に行って、実際の社会の中で、ということはおっしゃっていたので。

中村：

短大を、特に初期に卒業した人たちは、チェンジ・エージェントの役割を担いながら社会で苦労したんだろうなとちょっと思いながら。でも、そののね、どういう人たちを育てたいのかというようなことをベースに、Tグループの中の価値観というのがつながってきたんだなということを改めておっしゃって。ちなみに、うちのゼミの目的は「チェンジ・エージェント力を高める」ということで、一応歴史につながっております。

土屋：

ありがとうございます。

どうコメントしたらまとまるのか、まとまらないのか、まとまらなくてもいいかなと思いながらおりますけれども、私からも少しコメントをさせていただきたいと思います。

「人間関係論」という言葉とか「人間関係」ということが、すごく前に出て語られていたなと思っています。その一方で、中野清先生がどこかで書かれていたものを読んだんですけど、すごく模索して進んできたけれども、最終的にこういう人間関係が良いんだという形を提示できなかったというような書き方をされているシーンがあって、それがすごく印象的だったんですよね。

では、人間関係科とか人関センターが取り組んできたことは何なんだろうという話です。「学ではない」というのもそうだなと思ったんですけど、その中で実はこういうことかなと分かったのが、「人間関係の学び方」というのをずっと模索してきたんだということなんですよ。言葉で言う人間関係学習、漢字で言う人間関係学習論とか、どういうふうに人間関係を学んでいくのかと

いうことを非常にたくさん模索してきたし、それは今でも有効だしというようなことにハッと気づいた瞬間があり、今もそうだなと思っております。その中で今回新しい本を書いていこうというところ、それこそ津村先生、山口先生、お二方が鬼籍に入られた中で、今いるセンター員でひとつ本をつくっていくということが大事じゃないかということで、やってきました。

そのときに、やはり書けたこともあれば、書けなかったことというものすごくあるなというのはあるんですよね。その中で1つあるのは、直接的にスピリチュアリティのこととか宗教性に関することとかというのは、それぞれには残っているし大事だと思うんですけど、すごく中心に据えて書くというメンバーが、今は人間関係センターにはいなかったなあという話は意識しているし、そのことは新しい本には書けなかったけど大事にしていることとして持っていたいなと思います。

人間関係トレーニングの本の「はじめに」の初版のところを見ると、もう、すぐに「キリスト教的価値観に基づいて」というのがバーンと出てくるんですよね。そういうことがある中での営みということなのか、そうではないのかというのは、意識しないといけないだろうなと思ったりしています。その中で今の時代をどんなふうに捉えるかということなんですからけれども、2000年以降だったりいろいろなことの中でアメリカを見ても、分断であるとか格差であるとか、そういったことが中心になってきたり、今のいろいろなことがまたどんどん進んでいっていると思います。

そのときに思い出すのが、グラバア先生と何かお話ししていたときに、ラボラトリーの体験学習ですごく大事なだとそれに取り組みながら思ったりするのは、人ってこんなに違うんだ、一人ひとりというのはこんなに違うんだということを感じるんだと話されていたことです。例えば、ある人が大事にしているものも、ある人にはそうじゃないとか、そういうレベルだけではなくて、もっとそもそもの見方とか捉え方とか、そのレベルからこんなに違うんだという、想定もしていなかったことに、この場があることによって触れていくことができるという、そんなことを話されていたのがすごく印象に残っています。

先生、よければ何か話されますか。

グラバア：

いいですか。

土屋：

はい、どうぞ。

グラバア：

今の、スピリチュアリティということと関連があるかなと思って、ちょっと話をさせていただきます。

皆さんに差し上げた資料の2の1を見ていただきたいんです。ここに「ジル・ボルト・テイラー博士のTEDの講演から得た体験学習への新しい光の当て方」

というのを書いてみました。どんなものでもいいかなということで書いてみました。

突然ですが、ちょっと読んでみます。「そのような右脳優位の状態を」と書いてあって、突然ですよ。これはどういうことかということ、彼女はハーバードの新進気鋭の脳科学者なのですが、彼女自身が脳梗塞をやって、左脳の機能をどんどん、どんどん喪失の奔流に流されるわけです。つまり、言葉もしゃべれない、言葉も理解できない、認知もできない。そういう状態になって、左脳の機能が本当にシャットダウンした状態なんです。しかし、彼女はこう言うんです。「なんて幸せなの。素晴らしい。至福のとき。ただ唯一感じられるのは、周囲の大きなエネルギー。そして、自分はそのエネルギーとつながっている」。自分の手の境界と壁の境界やなんかが混じって分からなくなっている状態なんです。「人間という兄弟姉妹、頭のおしゃべりはやみ、静かで平安。今までの何十年のストレスや心の重荷から解放され、仏教だったら悟りの世界、極楽浄土と言うでしょう」と表現して、さらに、こうした体験がどんなに人々の役に立つかと気づいて、彼女はそれをエネルギーとして、8年間懸命にリハビリに励みました。そして、彼女は言語を取り戻し、TEDの講演に至ったわけですね。「さて、私たちは何者なのでしょう。私たちはこの世界でどんな人間でいたい。瞬間、瞬間、今ここで選ぶ力があります。右脳意識に歩み寄ると、そこでは私は宇宙の生命力です。私をつくる50兆の細胞の美しい分子が一体となった生命力の塊です。あるいは左脳に行って、1個の人間としてあることを選べます。大きな流れや他の人とは別個の存在です。私はジル・テイラー。理知的な神経解剖学者です。この2者が、私たちの中にある私たちなのです。皆さんはいつ、どちらを選びますか」。それで、ここがすごく盛り上がるところで、「私たちがより多くの時間を、右脳にある深い平安の回路で生きることを選択すれば、世界はもっと平和が広がり、私たちの地球はもっと平和な場所になると信じています。そして、これは広める価値のある考えだと思うのです」ということで、もうすごいスタンディングオベーションだったのです。そして、ここで私も感動しました、彼女の言葉を直接映像で見て。しかし、多くの人は、本当に拍手をした人は、「でも、右脳意識に歩み寄るというのはどういうことか、具体的にどうしたらいいの？」とすごく考えたに違いないと思ったんです。

それで私の答えなのですが、それはまさに1973年からやってきた教育の冒険そのもの、人間関係研究センターでやり続けていることそのものだ。そうか。そして、この私たちがやってきたことは、平和教育でもあるんだと。そのときに本当に、私には新しい光が差したような気がしたんですね。もっと具体的にどういうことかというのは、資料2-2にCopilotに要約させているので、皆さんどうぞそれを読んでみてください。

スピリチュアリティということも書いてあるのですが、やはりそれは精神性と理性との素晴らしい懸け橋になっているという言われ方をしています。

最後に一言だけ。私としては、提案できるものとして「今ここに」というキーワードを、もう一度大切にさせていただいたらどうかと。それはTグループの中でということでは全然なくて、教育全体としてということです。意外かもしれないんですが、今回のセンターのカタログには「今ここ」というフレーズはないんですね。「今ここに」、これは人関の卒業生のキーワードのアンケートを取ったときに、絶賛第2位でした。

第1位は「ふりかえり」です。そして、3位は「フィードバック」。まだまだありますけど、「人間の尊厳」とか、そういうものがあります。

以上です。

土屋：

ありがとうございます。

そろそろお時間ですが、今振り返ると、私も人間関係の学び方の中で、ラボラトリー方式の学び方って何だろうというふうなことを振り返ったときに気づいたのが、リフレクションとふりかえりということだけだと、ほかでもあったりするんですよ、看護教育だとか、やったことに関して個人で振り返るとかいうことがあったりするんですけど、一緒に過ごした、関わりを持った、その人たちと一緒にふりかえる、ともにふりかえるというのは、なかなかほかではない枠組みだったなと思っています。まさに、「今ここ」で体験したことに関して一緒にふりかえていく、そこにはフィードバックも入ってくるでしょうし、その中でともに生きるということを探っていくんだ、そのようなことの実践が、今も、これからも続いていくことになると思っています。

では、これで座談会の時間は終了としたいと思います。皆さま、本当にどうもありがとうございました。

私たちは今、歴史の中のどこに立っているのか

(資料1)

ライフスタイルの変化	年	国連の活動と アメリカの社会活動	体験学習の成立過程
●生存指向ライフスタイル (Survive oriented Life-style) キーワード：衣・食・住 経済力・学歴 転換点 ●成長指向ライフスタイル (Growth oriented Life-style) ＜人間の尊厳のために＞ キーワード：自己実現 A.マズロー 自己開示 S.ジェラート 対話 M.ブーバー 私であること 個であること 共にあること 物質的な豊かさ 精神的な豊かさ ●いのち指向ライフスタイル (Life oriented Life-style) キーワード：公害・環境破壊 レイチェル.カーソン 共生 黒川紀章 宇宙船地球号 R.バックミンスター・フラー ホリスティック アプローチ	1914 1939 1940 1945 1948 1950 1960 1968 1970 1975 1879 1981 1993 1998 2001 2009	第一次世界大戦開戦 大恐慌 第二次世界大戦開戦 国連発足 世界人権宣言採択 <u>黒人解放運動</u> <u>学生運動</u> 国際人権年 キング牧師暗殺 ローマ会議「成長の限界」 <u>女性解放運動</u> ウーマンリブ フェミニズム 国際婦人年 国際<u>児童</u>年 国際障害者年 <u>マイノリティー</u> 障害者・少数民族 セクシュアリティ (LGBT) <u>先住民</u> 世界の先住民民族国際年 世界人権宣言50周年 国連文明間の対話年 オバマ氏大統領就任	(1924~32 ホーソン実験) 1941 日本参戦 (対米) 1946 K.レヴィン・K.ベネ コネチカットにて ワークショップ 1947 T グループ 誕生 1958 日本における 第1回 T グループ 1962 立教大学キリスト教 教育研究所 (JICE) 設立 1968 日本にて大学紛争多発 1968 南山短期大学 英語科 創設モットーとして 人間の尊厳のために 「HOMINIS DIGITATI」 が掲げられる 1969 立教大学 ロックアウト 1971 日本における 第1回学生 T グループ 1973 南山短期大学 人間関係科創設 1977 人間関係研究センター 設立 1998 国際医療センター JICA に協力 1999~ パキスタン(4回)・ カンボジア・バングラ ディシュに、HRT の導入 2000 南山大学 心理人間学科創設 人間関係研究センター 設立

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料 2-1)

ジル・ボルト・テイラー博士の TED 講演から得た体験学習への新しい光の当て方

そのような右脳優位の状態を「なんて幸せなの。素晴らしい。至福の時、唯一感じられるのは周囲の大きなエネルギー、そして自分はそのエネルギーと繋がっている。人類という兄弟姉妹。頭のおしゃべりは止み、静かで平安。今までのストレスや心の重荷から解放され、仏教だったら悟りの世界、極楽浄土というでしょう」と表現し、更に続ける。

この体験がどれほど大きな恵みとなるか、生きている人たちに、どれほど深い、強い洞察を与えうるか気づき、それが回復の力になりました。(1996 年発症、8 年のリハビリ)

さて私たちは何者なのでしょう。私たちはこの世界でどんな人間でいたい瞬間瞬間、今ここで選ぶ力があります。右脳意識に進み寄ると、そこでは私は宇宙の生命力です。私を造る 50 兆の細胞の美しい分子が一体となった生命力の塊です。

あるいは左脳に行って、一人の一個の個人としてあることを選べます。大きな流れや他の人とは別個の存在です。私はジル・テイラー、理知的な神経解剖学者です。この二者が私の中にある“私たち”なのです。皆さんは、いつ、どちらを、選びますか？

私たちがより多くの時間を、右脳にある深い平安の回路で生きることを選択すれば、世界はもっと平和が広がり、私たちの地球ももっと平和な場所になると信じています。

そしてこれは広める価値のある考えだと思ったのです。

Q 多くの人は「でも、どうやって右脳意識に歩み寄るの？」と思ったに違いない。

A：私は答えを知っている。それはまさに、1973 年からやってきた「教育の冒険」

そのもの、人間関係センターでやり続けていることそのものだ。

そうか、そしてこれは 平和教育でもあるんだ。

大切にしたいキーワードの一つ「今ここ」

1, ジョーゼフ・キャンベル： 神話学者

人間が本当に求めているのは【今生きているという経験】だ

J. キャンベル、B. モイヤーズ著 『神話の力』 早川書房 1992 年

2, ジョン・カバト＝ジン： マサチューセッツ大学医学部名誉教授

ストレス低減クリニック創設者

「今」に精神を集中させる

3, エックハルト・トール：

いま、この瞬間、ここにあるとき、愛、喜び、平和を経験します

エックハルト・トール著『さとりをひらくと人生はシンプルで楽になる』

徳間書店 2002 年 原題 The Power of NOW

*参考文献 グラバア俊子 『五感の力』 創元社 2013 年 152 頁～157 頁

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料 2-2)

グラバア俊子のリクエスト

『2008年2月にジル・ボルト・テイラー博士がTEDで講演した内容を整理し、彼女が、彼女の体験から広める価値のある考えだと思った内容の要約を作成して下さい。』

Copilot の発言

ハーバード大学の脳科学者ジル・ボルト・テイラー博士がTEDで行った講演は、彼女自身が脳卒中を経験したことに基づく、非常に個人的かつ深遠な内容でした。以下に、その講演の要点と、彼女が「広める価値がある」と考えたメッセージをまとめます。

講演の要点

- **脳卒中の体験** 博士はある朝、脳卒中を発症し、左脳の機能が徐々に停止していく過程を、脳科学者として冷静に観察しました。言語、運動、自己認識といった機能が失われていく中で、彼女は右脳の意識だけが残された状態を体験します。
- **右脳の世界の感覚** 左脳の「内なる声」が沈黙したとき、彼女は自分の身体の境界が曖昧になり、周囲のエネルギーと一体化するような感覚を得ました。それは「ラ・ラ・ランド」と彼女が呼ぶ、深い平安と幸福に満ちた世界でした。
- **左脳と右脳の違い** 左脳は言語、論理、過去と未来を扱い、「私」という個の意識を生み出します。一方、右脳は現在の瞬間に生き、感覚とエネルギーを通じて世界とつながる意識をもたらします。

博士が広めたいと考えたメッセージ

テイラー博士は、より右脳の意識に歩み寄ることで、私たちは内なる平和と他者との繋がりを感じながら生きることができ、世界はもっと平和になると提案しました。

この講演は、科学とスピリチュアリティの橋渡しとも言える内容で、今も多くの人に深い感動と気づきを与えています。

テイラー博士が伝えたかったのは、人間の脳には異なる視点をもたらす回路があり、**どの視点に身を置くかによって、世界の見え方も、自分自身のあり方も変わる**ということです。たとえば…

- **左脳モード**で生きれば、過去や未来を考え、分析し、自己を区別して判断する日常が中心になります。これは社会生活に欠かせない一方で、ストレスや不安、孤独感を抱えやすい側面もあります。
- 一方、**右脳モード**で生きると「今ここ」に意識が集中し、感覚やつながりを強く感じられます。自己という枠を超え、内的な平安や愛、喜びを感じ易くなるのです。

博士は、脳卒中を通じて右脳の意識だけになったとき、「私は生きている」という深い安らぎを体験しました。だからこそ、**意識的に右脳の回路を活性化**することが、私たちの人生に調和と意味をもたらすと考えたのです。

これは、目の前の現実が変わらなくても、**自分の捉え方と反応は自分で選べる**ということでもあります。

*参考文献 ジル・ボルト・テイラー「奇跡の脳」 新潮社 2009年

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料3)

★いのち指向ライフスタイルにおける、ホリスティック・アプローチ

ホリスティック教育とは、人間を「知的・感情的・社会的・身体的・創造的・精神的な存在として総合的に育む」教育アプローチです。

特徴

- ・ **全人的成長**：学力だけでなく、社会性や自己肯定感、協働スキルなど多面的な成長を重視
- ・ **体験学習重視**：教室の枠を超えた自然体験やプロジェクト学習で「現実の課題解決」を学ぶ
- ・ **統合カリキュラム**：STEAM教育(科学・技術・工学・芸術・数学の統合)など、複数領域を横断的に学ぶモデルが代表的



「育む今ここに」

人間関係科が共にあった記念として、南山短大の中庭に建てられた像（現在はR棟横に）